

# ひな形方式に対する（見かけ上の）反例

高 橋 直 彦

## 0. 摘 要

筆者は、1988年に「ひな形（照合）方式（TM方式）」という枠組を提唱し、以来、これに依拠しつつ音韻研究を行ってきた<sup>(1)</sup>。この枠組の骨子は、構造主義（IA方式）・生成文法（IP方式）双方の難点を回避し、利点を活かす点にある。（次頁「英語の複数形」に対する説明力の違い参照。また、「日本語の動詞の活用」のムービー <<http://raspberrys.jp/kaku.html>>、他の部門への応用の例として「英語の受け身文の分析」のムービー <<http://raspberrys.jp/np.html>>も参照されたい。）ときに見られる理論レベルの誤解の例として、構造主義を悪者に見立てた上で、生成文法という「正義の味方」がこれを成敗した、といった勧善懲悪風史観に立つ向きがあるが、文法史観として単純化し過ぎである。さらにまた、ひな形方式そのものに対する誤解の例として、「ひな形（照合）」という言葉で往年のパターン・プラクティスに象徴される単純な「型への当て嵌め」を連想しつつひな形方式を蔑視する向きもあるが、これもまた浅薄な誤解である<sup>(2)</sup>。

本稿では、ひな形方式に対する上記のような理論絡みの誤解とは別に、データ絡みの誤解（ときになされてきた「反例の指摘」）の例を採り上げて、これに対する正式な形での解答を試みる<sup>(3)</sup>。この種の反例というのは、具体的には例えば「sign [n]～signature [gn]」の交替に関してはうまく行くかに見えるひな形方式流の説明は、sign [n]～signing \*[gn]」の交替に関してはうまく行かないのではないかとといった類の指摘である。本稿では、以下、こうした反例が実は見かけ上の反例であって、ひな形方式に対するデータレベルの真の反例とはならないことを論じ、ひな形方式の妥当性をあらためて主張することにする<sup>(4)</sup>。

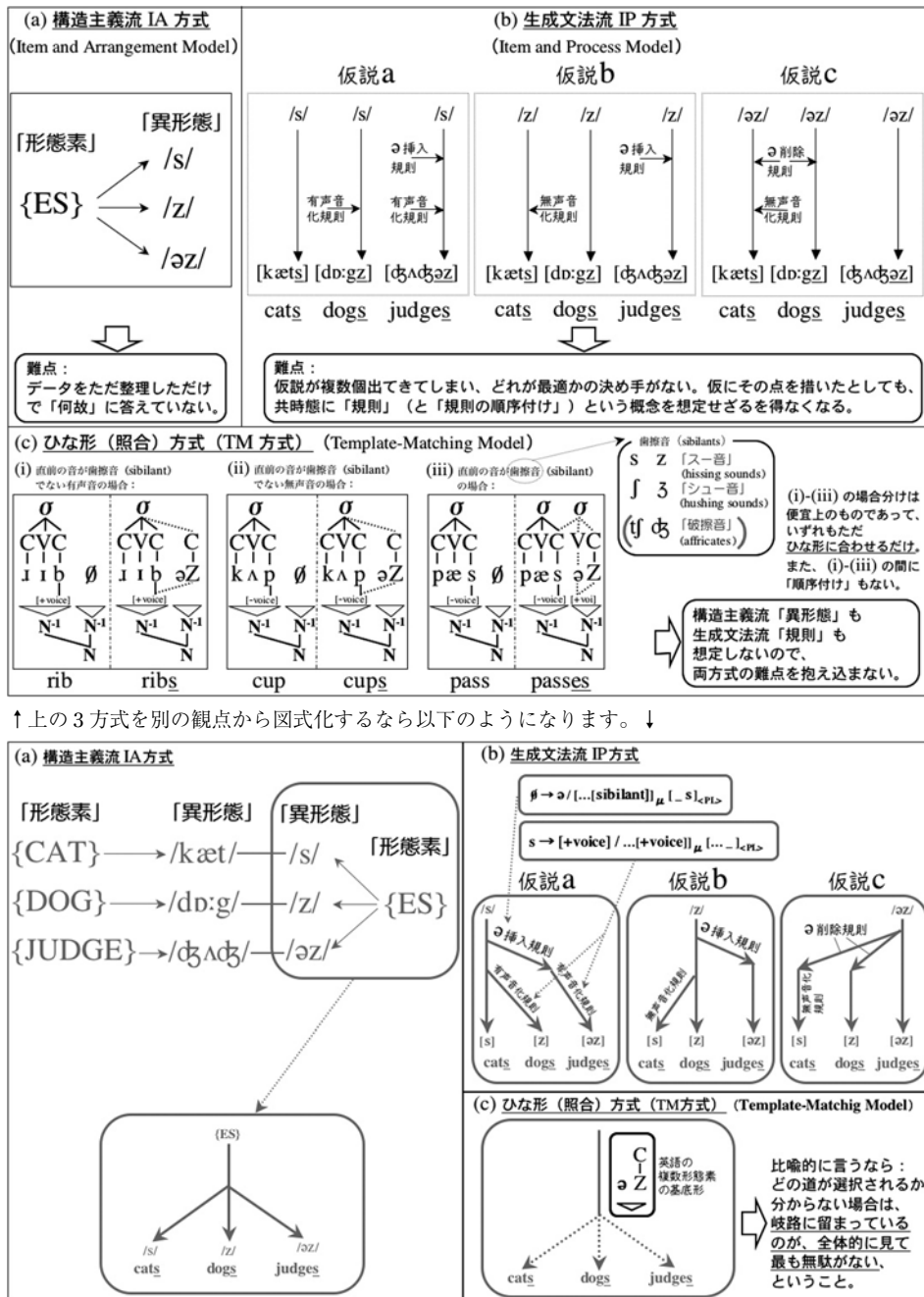
---

(1) 高橋（1988a, b, c, d; 1989a, b, c, d; 1990a, b, c; 1991a, b; 1992; 1995a, b; 1996a, b; 1997; 2000; 2005a, b, c; 2007; 2008; 2009; 2010）。

(2) 加えて、個人的には、パターン・プラクティスとして、外国語習得上の必要悪・乗り越えるべき関所であって、蔑視するのは習得後でも遅くはない、と考える。ただし、筆者個人の専門はあくまでも外国語教育ではなく、基礎研究としての言語学である。

(3) インフォーマルな形の解答は、既に学会での口頭発表といった機会でも折りに触れ公にしてきた。

(4) ただし、データレベルの議論・理論レベルの議論といっても、両者は、当然のことながら、截然と分たれる訳ではなく、こうした区分は多かれ少なかれ便宜上のものであるという、科学的営為一般に当てはまる点を想起されたい。データに対する特定の見方は、なんらかの理論的視点を必然的に前提するからである。



1 節では, sign [n]~signature [gn] の交替に対する IA 方式・IP 方式・TM 方式 3 者の説明の仕方を比較参照する。結論として, IA 方式が依拠する「異形態」にも IP 方式が依拠する「(変更) 規則」にも依拠しないで済むという点で TM 方式の説明法が妥当であることを確認する。2 節では, 1 節で確認した TM 方式のもつ妥当性が, データを sign [n]~signing

\*[gn] の交替にまで扱った場合、（一見）頓挫するという（見かけ上の）反例のケースを見る。3 節では、2 節で見た反例が、TM 方式を精緻化することで、見かけ上の反例と見做し得ることを指摘し、TM 方式のもつ妥当性を再確認する。

### 1. 3 方式の比較——TM 方式の妥当性

図(1)を参照されたい<sup>(5)</sup>。図で[割愛]している部分を補足する形で述べるなら、次のようになる。sign [n]～signature [gn] の交替に対する「説明」として、IA 方式では、形態素 {SIGN} に関して「異形態」/sain/～/sign/ という概念を想定せざるを得ないし、また、IP 方式の場合は、「g- 削除規則」か「g- 挿入規則」かいずれかの「(変更) 規則」という概念を想定せざるを得ない。これに対して、TM 方式では、「ひな形」というどの道必要な概念に依拠するのみで、IA 方式の「異形態」という概念にも IP 方式の「(変更) 規則」という概念にも依拠しないで済んでおり、その意味で理論上の経済性を達成していることになる。「同一現象を説明する際、少ない道具立てで済ませられる理論の方が相対的に優れた理論と判定される」という科学一般で広く受け入れられている評価手順（経済性の原理）により、3 者の中で TM 方式が多とされることになる。なお、ここでは詳細を省くが、ひな形への照合操作は、英語では「L ← R（右から左）」、日本語では「L → R（左から右）」という形で「方向性（directionality）」のパラメーターが獲得時に（1 度だけ）選択・固定される、と想定する。（「1 度だけ」という条項が意味するのは、TM 方式という枠組が（大人の文法に関して）「派生依存文法（derivation-dependent grammar）」ではなく「派生非依存文法（derivation-independent grammar）」である、という点である。因みに、IP 方式は規則適用が大人の文法獲得後も一々の派生の度に行なわれる派生依存文法である。この意味でも、IP 方式は妥当性を欠く理論である<sup>(6)</sup>。）

### 2. TM 方式に対する反例？

本節では、前節で確認した TM 方式のもつ妥当性が、データを sign [n]～signing \*[gn]

- (5) 図(1)は口頭発表時のものを流用している。「もの言い」が論文調になっていないのはそのためである。ご了承を請う。
- (6) 無論 TM 方式でも「ひな形照合操作」自体は派生の度ごとに行なわれるものの、この操作は、変更規則適用操作と異なり、基本的にコストレスな（もしくはコストレスに限りなく近い）操作と想定される。対して、変更規則適用操作は、そもそも、脳内に多数の規則+規則の適用順序を保持し続けねばならないという静的コストに加え、実際の規則適用の際にも、多数の規則の中から当該規則を走査し選択するコスト（+規則の順序づけを遵守しつつ適用するコスト）という動的コストがかかる蓋然性がある。加えて、IP 方式では、基底表示から表層表示に至るまでの派生の間、規則適用の度に表示の変換が行われるという（TM 方式には不要な）「紆余曲折」を経ることになる。

(1)

- campaign~campaigner : g は発音しない。sign~signature : sign の g は発音せず、signature の g は発音する。これだけのデータからでも (1) 綴り字と発音は区別すべき、(2) sign~signature での g の発音には法則があるのか、あるとすればどのような法則か、等の問題意識をもつことができる。

つづりに  
 綴字 (spelling) と発音とを混同してはいけない。  
 ていで

**例1:**

交替形	交替	交替形	← 綴字 (spelling)
campaign	~	campaigner	
[ ]		[ ]	← 発音

上例では、綴字 'g' はいずれの交替形を見ても発音されていない。  
 このような場合、音形 (≒発音) に関する理論では無視して構わない。(というよりも、無視しなければならない。)

**例2:**

交替形	交替	交替形	← 綴字 (spelling)
sign	~	signature	
[ ]		[g]	← 発音

上例では、綴字 'g' は 'sign' という交替形では発音されず、'signature' という交替形では発音されている。  
 このような場合、音形 (≒発音) に関する理論ではこの交替を何らかの形で説明しなければならない。

① 構造主義流の「異形態」に基づく分析 : → [割愛] いずれもうまくいかない。  
 ② 生成文法流の「規則」に基づく分析 : → [割愛]  
 ③ ひな形照合方式に基づく分析 : → 以下を参照。

音韻構造  
(の一部)

形態構造  
(の一部)

~

~

← 音節のレベル

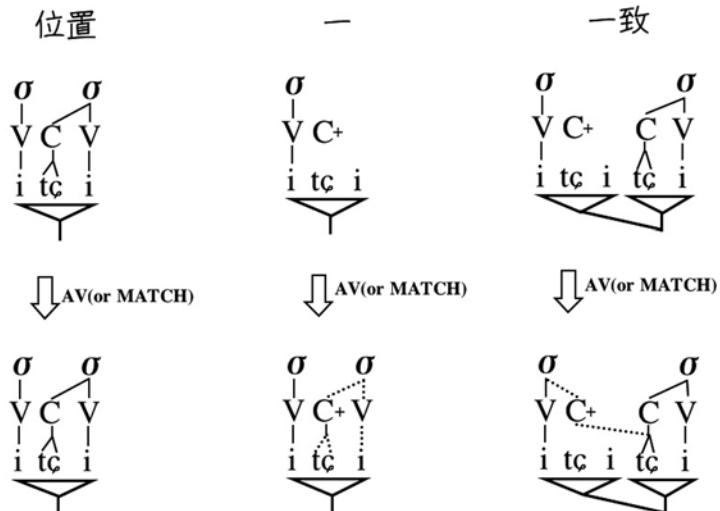
← 子音/母音に対応するスロット  
(C=子音、V=母音、X=子音 or 母音)

← 子音/母音

← 形態素のレベル

← 単語のレベル

- 日本語でも、「位置」と「一」の「ち」は一見同じに見えるが、「一」の方は「一(ip)杯」「一(it)旦」「一(ik)回」等と形を変える。法則はあるか、あるとすればどのような法則か。こうした観点から、英日語の発音を考察し得る。





るという側面を共有してはいるものの、そのことに加えて、[ə]は「-atureという形態素を構成する母音」であり、[ɪ]は「-ingという形態素を構成する母音」である、という形態音韻上の資格の違いをも有しているのは明らかである。だからこそ、母音という共通項にも拘わらず、データの上で異なった振る舞いを示すのである。現に伝統的にも、-atureと-ingとは形態音韻上異なった類に所属するものとされるのが一般的である。

以上の考察から、理論構築に関し、次の示唆が得られる。即ち、言語データが sign [n] ~signature [gn] に対するものとして sign [n] ~signing [n] という交替を示す以上、「(2)よりも形態音韻レベルに一層配慮した説明法」を追究すべし、という示唆である<sup>(7)</sup>。ただしここで(例えばかつての語彙音韻論のような)「規則アプローチ」を援用したのでは、IP方式に逆戻りすることになってしまい、元の木阿弥である。我々は「規則」もそしてできれば「異形態」も用いない方式を追究せねばならない。

結論を述べる。要は発想の問題である。文章による説明では解りづらいので、図示し((3b): A picture paints a thousand words!), ポイントのみを以下列挙する((3a))<sup>(8)</sup>。

### (3a)

- ・語彙音韻論流の「派生」モデルで得られた知見は 規則なしの「表示」モデルで把握可。「サイクル」や「厳密循環条件」(Mascaró (1976), Kiparsky (1982))といった道具立てで捉えようとした知見も自然な形で説明可。
- ・各形態素  $V^2$  はしかるべき「Domain」(I, II等)に配置される。
- ・形態素  $V^2$  は  $V^2$  のままでは他の Domain の要素と関係づけることができない(=連結線を引くことができない)と想定する。関係づけるためには  $V^1$  のレベルが必要となる(比喩的に述べると「服を着ないで外へは出られぬ」or「靴を履かずに外へは出られぬ」)。
- ・ $V^1$  と関係づけられる(=連結線が引かれる)ことが Template-Matching (=AV or MATCH) の引き金(trigger)となると想定する。
- ・ $V^0$  のレベルが「単語」のレベルである。統語構造中のしかるべき位置に挿入されるためには、「単語」のレベルになっていなければならない。(=「形態素  $V^2$ 」のレベルのままでは文中に生起できない。

(7) 実は、(2a,b) 左側の sign の形態構造に関して、形態素「2つ」で構成された形の配置型で表示したのも、こうした形態音韻的考察を先取りしたものである。

(8) 「運用モデル」では、(3b) ①-④の段階が適用済みの形式が Buffer に貯蔵されており、即時に抽出・使用される、というケースも発話によって想定し得る。



以上、本稿では、(2b) に類するデータは TM 方式にとって何ら致命的な反例とはならず、見かけ上の反例に過ぎないという点を論証した。これにより、TM 方式の妥当性がさらに裏付けられることになる。

#### 4. 補 説

前節では、論の展開上 形態音韻論的な視点の重要性を指摘した訳だが、この点にまつわるよくある別種の誤解についてもここで指摘しておきたい。

- ・形態論の分野では、「自由形態素」対「拘束形態素」ということが一般に言われる。そして、両者の違いは、便宜上「ハイフンの有無」等に表示される (e.g. *sign vs. -ature*)。しかし、前節で見た TM の枠組に基づくなら、この違いは「理論上の虚構 (theoretical fallacy)」であるということになる。例えば、*They will sign a new player.* における *sign* は、「自由形態素」という名称にも拘わらず、理論的には、(2a, b) の左側に示したように、「拘束形態素」*sign-* + 「拘束形態素」 $-\emptyset$  に他ならないと見做せる (し、そう考えた方が筋が通っている) からである (註 (7) 参照)。 *They are signing a new player.* における *signing* も同様に、「拘束形態素」*sign-* + 「拘束形態素」*-ing* に他ならないと見做せる。(名詞の *sign* の場合も同様。単数形は「拘束形態素」*sign-* + 「拘束形態素」 $-\emptyset$ 、複数形は「拘束形態素」*sign-* + 「拘束形態素」*-s*。)
- ・こうした観点に立てば、*transmit* の *trans-*、*-mit* も、*sign-* も共に「拘束形態素」ということになる。両者の違いはと言えば、*sign-* が、レキシコンの中に単語とは別個に独立の素材 (=形態素) としても記載されているのに対して、*trans-*、*-mit* はレキシコンの中に単語の中に組み込まれた形でのみ記載されており、単語と別個に独立の素材 (=形態素) として記載されていない、という点である。(この想定事項により、後者の非生産性もまた説明可となる。)
- ・例えば、不規則活用動詞の *went* は、厳密には「異形態」と呼ぶことはできない。*went* は、レベルとしては「形態素」よりも上位の「単語」のレベルで不規則な形式だからである<sup>(9)</sup>。

(9) 因みに、*undergo* ~ *underwent* 等はどう扱うのかに関しては、*overcome* ~ *overcame vs. welcome* ~ *welcomed* 等のデータの扱いと共に稿を改めて論じたい。



## 参 照 文 献

- 平河内健治（編）（1989）『言語構造の表示と派生（Forms and Processes of Linguistic Structure）』、仙台言語学研究会。
- 平河内健治（編）（1990）『生成文法の方位（Perspectives in Generative Grammar）』、松柏社。
- Kiparsky, Paul (1982a) "From cyclic phonology to lexical phonology", In H. van der Hulst and N. Smith (eds.), *The Structure of Phonological Representations*, vol. 1, Dordrecht: Foris, 131-175.
- Mascaró, J. (1976) *Catalan Phonology and the Phonological Cycle*, Ph. D. Dissertation, Department of Linguistics, M.I.T.
- 音韻論研究会（編）（1996）『音韻研究 理論と実施 — 音韻論研究会創立 10 周年記念論文集 —』開拓社。
- 高橋直彦（1988a）「Avoid Empties について」, コトバの会第 18 回例会に於ける発表原稿, 於東北学院大学。
- （1988b）「Underspecification and Avoid Empties」, 東北英文学会第 43 回大会に於ける発表原稿, 於秋田大学。
- （1988c）「Avoid Empties and Syllabification」, 日本言語学会第 97 回大会に於ける発表原稿, 於神戸市外国語大学。
- （1988d）「原理 Avoid Empties について」, 『東北学院大学論集（英語英文学）』第 80 号東北学院大学, 99-154.
- （1989a）「音節理論における Avoid Empties について — Prosodicization Theory の適用例 —」, 『英語英文学研究所紀要』, 第 18 号, 東北学院大学, 91-147.
- （1989b）「素性階層構造とひな形アプローチ」, 東北英文学会第 44 回大会（1989 年 10 月 8 日, 於仙台白百合短期大学）における発表原稿。
- （1989c）「音韻部門におけるひな形アプローチについて」, 日本言語学会第 99 回大会（1989 年 10 月 15 日, 於関西学院大学）における発表原稿。
- （1989d）「音韻理論の目指すもの」, 平河内（編）, (1989), 87-106.
- （1990a）「音韻部門におけるひな形アプローチの妥当性について」, 『英語英文学研究所紀要』, 第 19 号, 東北学院大学。
- （1990b）「Prosodicization Theory について」, 平河内（編）, (1990), 375-444.
- （1990c）「音韻階層構造についての一考察」, 日本言語学会第 100 回大会（1990 年 5 月 30 日, 於東京大学）における発表原稿。
- （1991a）「文法内規則と文法間規則について」, 東北英文学会第 46 回大会（1991 年 10 月 5 日, 於宮城教育大学）に於ける発表原稿。
- （1991b）「音韻理論における変更規則の位置づけ」, 日本言語学会第 103 回大会（1991 年 10 月 27 日於南山大学）における発表原稿。
- （1992）「文法内規則と文法間規則について」, 『英語英文学研究所紀要』, 第 21 号, 東北学院大学, 33-70.
- （1995a）「現代日本語の動詞の活用」, 『東北学院大学論集（人間・言語・情報）』第 110 号, 東北学院大学 107-78.
- （1995b）「Synchrony Can Do Without Changing Rules / Conventions」, 日本言語学会第 111 回大会（1995 年 10 月 15 日, 於東北大学）における発表原稿。
- （1996a）「(英語) 音韻論に変更規則・変更規約は不要である」, 『東北学院大学論集（人間・言語・情報）』第 113 号, 東北学院大学, 163-214.
- （1996b）「英語の rhotics のふるまい」, 音韻論研究会（編）, (1996), 127-8.
- （1997）「いわゆる -ng (-) をもつ形式について」, 『東北学院大学論集（人間・言語・情報）』第 117 号, 東北学院大学, 129-172.
- （2000）「[弾音の生起環境]」, 『東北学院大学英語英文学研究所紀要』第 29 号, 東北学

院大学, 67-114.

- (2005a)「音韻理論における経済性 (Economy in Phonological Theory)」東北学院大学英語英文学研究所定例公開講演会 (2005年9月28日 東北学院大学泉キャンパス) における発表原稿
- (2005b)「純粋な「音韻論」は想定可能か？」日本英語音声学会 EPSJ 第7回東北支部大会 (2005年12月3日 東北学院大学土樋キャンパス) における発表原稿
- (2005c)「英語の否定接頭辞 in-, un- の形態音韻論」, 『東北学院大学論集』第142号, 東北学院大学 53-75.
- (2007)「ひな形方式の他の部門への適用の可能性」日本英語音声学会東北・北海道支部第1回研究大会 (2007年10月27日 東北学院大学土樋キャンパス) における発表原稿
- (2008)「ひな形方式の適用可能性」東北英文学会 (日本英文学会東北支部) 第63回大会 英語学・英語教育部門シンポジウム「言語理論の進展とその応用－言語教育・自然言語処理を手がかりに－」(2008年11月24日 東北学院大学土樋キャンパス) における発表原稿
- (2009)「英語における語頭の /j/ と語中の /j/ のふるまいの違い」, 『東北学院大学教養学部論集』第154号, 東北学院大学, 91-103.
- (2010)「連濁に対する (見かけ上の) 反例」, 『東北学院大学教養学部論集』第155号, 東北学院大学, 55-68.